

日本図の変遷

～赤水から伊能～

小野寺淳 平井松午

……12



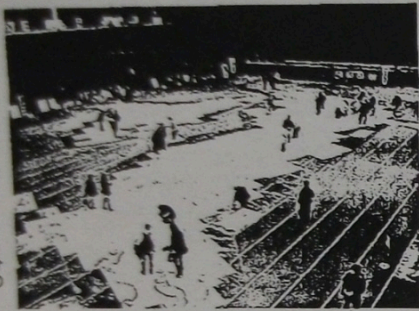
伊能忠敬肖像
(伊能忠敬記念館蔵)

伊能忠敬(一七四五―一八一八年)を存じの方は多い。十五歳から足かけ十七年かけて全国津々浦々を測量し、初の実測日本地図を作製したことはよく知られている。

巨大な日本地図「伊能図」

忠敬は、十次にわたる測量のたびに下図や地図を作製し、忠敬没後の一八二一(文政四)年七月十日には、忠敬の上役にあたる高橋景保と孫の忠誨によって、最終版の伊能図となる「大日本沿海輿地全図」が幕府に上呈された。高橋景保は幕府天文方の役人で、わが国を代表する天文学者であったが、のちにシーボルト事件(シーボルトが禁制の日本図などを国外に持ち出そうとした事件)で死罪となる。

忠誨が下総国香取郡佐原村(現在の千葉県香取市佐原)の



伊能大図(縮尺3万6000分の1)214枚を並べたフロア展
「アメリカ帰りの伊能図展」12
004年12月、日本大文学部で

伊能家に持ち帰った測量・製図器具や地図・絵図、文書・記録、書状、典籍類は、一部が一八九九(昭和二十四)年に重要美術品、五七年に重要文化財(書跡)、そして二〇一〇(平成二十二)年六月二十九日に「伊能忠敬関係資料」として二千三百四十五点が一括して国宝に指定されている。国宝(歴史資料)としては、「慶長遣欧使節関係資料」・琉球王国尚家関係資料」に続く三例目である。幕府に上呈された「大日本沿海輿地全図」は、一里(約三・九キ)を三寸六分(約一〇・九キ)に縮めた大図二百十四枚(縮尺三万六千分の一)、それらを六分のの一里六分とする中図八枚(同二万六千分の一)、さらに一里二分とする小図三枚(同四十三万二千分の一)の三種類。大図二百十四枚を広げた大きさは、バスケットボールコート四面ほどにもなる。

残念なことに、幕府上呈図の正本三組、それに伊能家旧蔵の副本三組は、一八七三(明治六)年の皇城火災や一九二三(大正十二)年の関東大震災によって焼失した。しかし、最終版伊能図以前に作製された下図や地図、最終版伊能図の複製図などが各地に残されている。このコラムでは、そうした伊能図を通して、伊能忠敬の足跡や地図作製へのこだわりをみていきたい。

(ひらい・しゅご) 徳島大名菅教授